



ナミビア通信

JICA 青年海外協力隊
2023 年度 I 次隊
エロンゴサ小学校
吉野 葵
2025 年 9 月 第 44 号

平山小学校の皆さんこんにちは。ナミビアの小学校で先生をしていた吉野です。(7 月末に日本に帰国しました。)

第 40 号から 43 号までの 4 号に渡り、「ボツワナ」「ジンバブエ」「ザンビア」「マダガスカル」「モーリシャス」と 5 つの国を紹介してきました。みなさんにとって気になる国、行ってみたいと思った国などありましたか?? それぞれの国について私が紹介したことは、その国のほんの一部に過ぎません。でも、その国のことを知れば知るほど好きになれるような気がします。私が紹介した国々に限らず、「スポーツの大会で日本と対戦していた国」「ニュースで名前が出てきた国」など、気になる国があったら本やインターネットなどで詳しく調べてみるのもいいかもしれませんね。たとえ、良い印象をもっていない国だったとしても、よく知ってみると違った部分が見えてきて、良さに気が付けるかもしれません。

さて、実は、第 43 号で紹介したモーリシャスという国には、本当は皆さんに紹介したかったけれど、書くスペースが足りず紹介できなかった世界遺産がありました。その場所は、世界中の人類に重要なことを教えてくれるような場所だと私は感じました。皆さんに紹介しないのはもったいないと思うので、このモーリシャスの世界遺産について、今回はモーリシャス第二弾として紹介していきたいと思います。

アープラヴァシ・ガード (Apravasi Ghat)

どこにあるの? どんどころ?

地図引用 (<https://www.travel-zentech.jp/world/map/Mauritius/index.htm>)

世界遺産の「アープラヴァシ・ガード (Apravasi Ghat)」は、首都ポートルイスの海のすぐ近くににあります。ヒンディー語で、Apravasi は移民、Ghat は船が着く場所を意味します。前回のナミビア通信で少し紹介した「イギリス植民地時代にインドから労働力として導入した移民」を最初にここで受け入れ、書類にサインをさせたり、健康診断を受けさせたりなど、ここで様々な準備をしていました。



← 入り口近くの看板にあった写真。
(現在、この施設は部分的にしか残っていません。)

アープラヴァシ・ガードでの移民たちの生活

せいかつ

前回のナミビア通信でモーリシャスの歴史を簡単に紹介しましたね。イギリスによる植民地支配が始まり、「奴隷制」が廃止されたことで、アフリカ大陸から連れてこられていた奴隷たちは解放されました。しかし、奴隷がいなくなり労働力が足りなくなったため、イギリス人たちはインドから大量の移民をモーリシャスに連れてくるようになりました。奴隷制廃止から1920年までの約85年間で、45万人を超えるインド人がモーリシャスに連れてこられたといわれています。このインド人たちは、最初に契約書に署名をした上で働いていました。つまり形式的には本人の同意のもとで働いていたということです。「奴隷」ではなく「契約労働者」になったと聞くと、状況が良くなったような印象を受けませんか？

しかし、実際の労働環境はとても悪く、低賃金（お金が十分にもらえない状況）で、長時間労働を強いられていたようです。モーリシャスに来る前は、「タダで船に乗ってモーリシャスへ行けて、働く場所まで提供してもらえて、給料ももらえる」という良い情報ばかりを聞いてインドからやって来た人が多かったようです。しかし、実際は奴隷とほぼ変わらないような待遇でした。十分な教育を受けていなかったため契約書の文字が読めず、意味がわからないまま契約書に署名をさせられた人もいたといわれています。

「奴隷制を廃止した」というのは、世界に対するアピールだったのかもしれませんが、でも、本当に大切なものは表向きの正義より中身だということを、ここに来て改めて感じたような気がします。

移民たちが暮らした施設の一部

とうじ 当時、インドから連れてこられた移民たちが収容された施設（アープラヴァシ・ガード内の展示）



↑移民たちの小屋と台所エリア



↑中庭
(到着した移民たちが整列させられた)



↑シャワー室エリア



↑監視役たちのオフィス



↑病院エリア



↑病院エリア内のキッチン